
クレイジードール

Tetsuya

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クレイジードール

【Nコード】

N8763Z

【作者名】

Tetsuya

【あらすじ】

山と海しかない田舎町に未来君はいた。

僕は偶然にも未来君の書く小説に登場してしまい長閑な中学校生活が急変していく。

現実を書く未来君ははたして神なのかそれとも……

現実と空想の交わる時、その少年は未来を変える。と格好付けてみたんですけど内容は馬鹿っぽいです。ぜひ読んでください。

注 この小説は完全に趣味で書かれています。

ごく稀に聞いた事があるような無いような台詞が出てきますが
気にしてはいけません。

ブローグ

ブローグ

「面倒だ」

やっちゃったな、教室に忘れ物するなんて

明日提出の数学のプリントを教室に忘れた僕は早足で教室に向かっていた。図書室で今日の宿題を済ましてから帰宅しようと思っていたんだけど。一番面倒な数学のプリントを最後に回していたから、無い事に気が付いたのはすっかり日が傾き始めたころだった。え、部活？そんなだるい事やってらんないって、僕は何にも縛られずに生きていくのさ。せめて学生でいる間だけでもね。

人気の失せた校舎を一人、てくてくと歩いているとグラウンドから部活動をしている連中の掛け声が聞こえてくる、全くもって何が楽しいのやら。

教室に着くと中から誰かまだ残っているのかシャープペンシルの音が聞こえてくる、教室に入ると僕の隣の席の日向未来君（コイツも帰宅部）がいて、原稿用紙と睨めっこしていた。

へえまだやってるんだ。

「ねえ未来君、なに書いてんの？」

中学二年生になり早一ヶ月が過ぎて、ようやくクラスの雰囲気が出来上がってきた今日この頃、いきなり隣の席の未来君が朝からいきなり原稿用紙にペンを走らせ続けていた。それは帰りのHRになっても止めず、僕が忘れ物を取りに教室に来た今現在まで続けた。

未来君は学年が上がってからのこの一ヶ月間ずっと誰とも関わらず、一人で読書ばかりしていて根暗なイメージが強かったんだけど、今日の未来君はこの一ヶ月間の時間を取り戻すかのように、執筆し

ていた。そんな事より友達作れよと僕は思う。といつても僕もあまりこのクラスでつるむ奴なんていないけど。

それを見た僕は興味本位で初めて未来君に声をかけた。その時の教室には忘れ物を取りに来た僕と原稿用紙に何かしら書き込んでいる未来君だけじゃなく、一人で自習している女子生徒と一人で本を読んでいる女子生徒を合わせて四人いた。思えばこの四人がこの時、この場にいたのは既に未来君のあらずじだったのかもしれない。

「これは、俺の夢だ」

突然声をかけた僕の方を向くこともせず未来君は抽象的な事を言った。窓から差し込む夕日のせいでその時の未来君の顔は見えなかったけど、きっと自信に満ち溢れた表情だったんだろうとその声だけで容易に想像できた。憎々しいことに

「夢？」

ようやく逆光に目が慣れてきて、ゆっくりとこつちを向いた未来君の顔が見える。想像していた通りの自信満々の笑顔で彼は言った。

「ああ、俺は………文士になるんだ」

後に僕は、未来君の夢に毎日付き合う事になるんだけど、この時はまだ知る由も無かった。一番悪いのはこの時に未来君を止めようとしなかった僕なのか、そんな運命を押し付けた神様なのかは分からないけど、やっぱりそれを書き続ける未来君を恨まずにはいられない。だけどそれも仕方ない事なのだろう。

そうだよな？ユウキ。

プロローグ（後書き）

自分の未熟さを衆目の下に晒す時が来ました。
辛口意見をお待ちしております。

No sister No brother 1

夢を見ていた、そんな気がする。目を開けたら朝だった。窓からは光が差していて、外からは小鳥がチュンチュンと囀る小さな演奏会が聞こえる、また僕のいつもと変わらない一日が始まった。

僕の部屋には、デスクトップパソコンと小さな本棚（本は入っていない）があるだけのベットも机も無い殺風景な部屋だ。確認のため左手を見ると何本もの線が走っている。世間では自傷行為と呼ばれているらしい、最近ニユースでよくやってる、結構流行ってるそうだ。理由なんて人それぞれで、大概の場合がイジメとか薬物中毒者とかがやるみたいだけど、僕の理由はその例に当てはまらず、突如の罪悪感と衝動に突き動かされるまま自分の身体を刻み付けていて、それでもこの世からオサラバする勇気も無く、しぶとく生き続けているのである。

情けない事に。

「今日は……何しようかな……」

確か昨日はオンラインRPGを一日中していた。何も無い部屋だけど、インターネットが繋がっている現状に感謝する。それで今日もゲームすればいいじゃないかと自分に問うと、キーボードの上の赤い絨毯を見る。

昨日の僕は何を思ったのか、ゲームの最中にいきなり死にたくなつて本棚からバタフライナイフを取り出して自分の左手に傷をつけた。血が傷口から流れ出るのを見て落ち着いた僕はしばらく自己嫌悪になり、適当に止血して寝た。その際流れ出た血がキーボードとコントローラーパッドに大量に付着していて、壊れてないとしても気持ち悪くて触る気にはなれない。なんてことは無い、ただの自業自得だ。

そんな自虐思考はコンコンと小気味のいいノックの音が部屋に響き中断される、母さんが朝食を持ってきたのだろう。毎日頼んでも

無いのに、律儀なものだ。僕が引きこもってから母さんと一度も顔をあわせていないし、会話もしていない、何も言っていないのだ。僕は足音が離れていくのを確認して小さくドアを開ける、顔をあわせないように、そして朝食ののったトレイを取りドアを閉める。いい具合に空いた腹を満たそうと箸を取った、すると遠くから聞き慣れたチャイムが聞こえてきた。

キーンコーンカーンコーン

そのチャイムは以前僕が通っていた高校から聞こえてきた。今では引きこもりの僕だけど、二ヶ月前のあの日まではちょっと引っ込み思案で個性の強い高校生だった。周りからはよく変わってるって茶化されたな。だけどそんな僕はある日を境に生きていく事に絶望してしまった。

そう僕は二ヶ月前にクラスのアイドルで可愛くてキュートで僕の密かな初恋相手の相沢菜子あいさわ なこさんに一世……いや十世代（十回の生まれ変わりの内、一回だけ）くらいの覚悟と勢いをもってラブレターを書いたのだ。（その日、朝のニュースの運勢ランキング1位だった）そして手紙に書いた場所に約束した時間の三十分前に行き、ドキドキしながら脳内で何回も告白するシミュレーションを繰り返し、よしっ！バツチ来い！とまで気合を込めた。

それなのに約束の時間に僕の目の前に現れたのは何故か相沢さんではなく親が仲がいいとかで幼馴染みであり年上の鳳遙おおとじ はるかだった。

「っ何でだよ!？」

と突っ込んでから、彼女の左手にある見覚えの無い桃色の便箋が握られていることに気付いた。もしか、誰か違う奴と告白の時間と場所が重なったのか？確かに客観的な目で見ると遙は美人だ、いや待て、だったら遙の相手が来ているはずだ！相手を呼び出しておいで遅れてくる奴などいないはず、そうだ落ち着け、冷静になれ僕！

「ねえ景人けいと、この手紙を書いたのって……」

「知らん！」

即答した。すると緊張していたのである。う遙はふうと小さくため息をついた。そんな仕草もサマになっている。一つ年上とは思えないほど大人びていて美人だ。外見に関しては、そう外見だけは！「だよねえ、景人にそんな度胸があるわけ無いもんね、やっぱりただの悪戯かあ、それで何で景人がここにいるの？」

うぐつ！

い、言えない、ラブレターを書いたけどすっぱかされたなんて、なんかもう情けなくて言えない。

「ちよつと、一人になりたかったただだよ、それに遙の方こそ何でここにいるんだよ」

遙は顔を若干しかめながら左手の便箋を見せつけた。便箋には筆書きで恋文とかなか男らしい字で書かれていた。何時の時代だよ。「どっかの馬鹿があたし相手に悪戯の手紙を書いてきてさあ、ぶちのめしてやるうと意気込んできたんだけど」

……………ぶちのめす？

「遙、その手紙の内容ってどんな感じ？」

脳が聞くな！聞くんじゃねえ！！とアラートをガンガン鳴らしているが好奇心が勝り、つい聞いてしまった。遙は少々男勝りな性格で気に入らないことには暴力で解決しようとする悪癖があるのだ。しかも凄く強い。好奇心は猫を殺すって奴。うかつなことを言う痛い目を見るのだ。

後悔？そんなもの、後でするさ！

「この手紙の内容？ええと

『拝啓 鳳遙殿、突然このような手紙を送りつけた非礼を許してもらいたい。この度某は貴殿それがしのあまりの美しさに筆をとった所存である』

って文から始まって七枚ほど筆書きで書かれてるの」

「どこのどいつだよ！？そんなふざけた手紙書いた奴！僕がぶん殴ってやる！」

いやいや殿つて女子相手にそりやねえだろとか言い回しが古臭いとか某とか名乗ってんじゃねえとかなんで桃色の便箋を使ったんだよ！とか突っ込み所満載だった。決して知り合いでは無いことを祈る。

「ええ、あまりにふざけてるからどこの馬鹿野郎かと気になって、思わず来ちゃったんだけど、そしたら景人が居るからビックリした」僕だつて相沢さんが来ると思っていたのに遥が来てビックリだよ。どんな詐欺だよ、僕の勇気を返せ！

「ところでさつきから景人がその右手に握り締めてる青い便箋は何？」

僕が一人で世の中の不条理を憎んでいると遥が僕の右手を指差す。その指先には……ガッチリ握り締められた相沢さん宛てのラブレターがあつた。

「ホワイ!？」

何で?なんで?ナンデ?僕のバカア!な・ん・で僕が持つてんだよ!そりや来るはず無いよ!一体僕はこの三十分間誰を待つてたんだよ!

「誰が来るはず無いの?」

聞・か・れ・て・たあ!どうするんだ僕!考えろ、落ち着け、大丈夫だ。この女は昔から鈍感だ。今から僕の巧みなトークで挽回してやるぜ。

「……景人つてさあ昔から自分の考えが口からだだ漏れだよね」「しまったあああああああ。ああ遥の視線が痛いいいいいいい!」「えっと、それつてもしかしてラブレター?」「ななななんて分かるんだよ。」

「ち、違うよ!これは……」

「これは?」

遥が疑惑の目でじいいつと効果音がつくくらい僕を見た。おいなんなんだよこの状況?ええい!!ままよ!もうどうにでもなれ!

「は、果たし状だ！」

遙の顔が一転して「ええええええ？」と若干引いたように後ずさる。

しまった、適当過ぎた！

「へえそうなの、だったらあたしは邪魔だよね、じゃさよなら」

あからさまに僕を蔑む目で見て、そそくさとその場から遙は僕から離れていく、一度だけ振り返り敬語で

「気持ち悪いから、今後話しかけてこないください」

拒絶された。

「嘘です！冗談です！ごめんなさい！」

何故か平身低頭で謝っている僕だった。

朝のニュースキャスターのおねーさん、今日の僕のラッキーアイテムってなんでしたっけ？今、用意できるものだといいな。

雲の無い青空を見上げて僕は現実逃避した。

No s i s t e r N o b r o t h e r 1 (後書き)

思いつきで書きなぐった第一話です。

少しですが、なるべく間を空けずに投稿していきます！

No sister No brother 2

「てな感じなんだけど、どう？面白いつしょ？」

「う〜〜んううう……………」

連休明けの教室で僕を待ち受けていたのは自作のライトノベルを自信満々に音読してくるクラスメイトの日向未来君^{ひゅうが みらい}だった。今日は早く来て寝る予定だったのに、いい迷惑だ。

「よくそんな自信満々で面白いつて言えるね、いきなり主人公がリストカットしてるじゃん」

「読者の目を釘付けだぜ！」

凄くいい笑顔の未来君だった。キラリと光る前歯が眩しい。彼は僕がこのクラスで唯一まともに話す相手なんだけど、別に仲が良い訳ではなくて僕は彼を友達だと思っていない。そういう訳で僕にも彼にも友達はいない、クラスでは浮いているほうだ。

ま、だからどうしたって事でもないけどね。

「僕はそこで興味が失せたけどね」

未来君のまぶしいぐらいの笑顔に対して、僕も出来る限りの笑顔で返した。

もちろん皮肉だ。

「都はクレームが多いな」

未来君は僕の目の前でフーヤレヤレとこれ見よがしに溜息をはいた。

地味にウゼエ。

「つけたくなる様な内容なんだもん、それに鳳^{ほう}って鳩子^{こう}ちゃんと同じ名字使ってるけど、なんで？」

僕が端っこの席でいつでも本を読んでいる鳳鳩子^{ほうこう}ちゃんを指差しながらそう聞いた。

それに対して未来君はふん、それはだなあ。と何故か得意そうに

説明する。

「鳳なんて珍しい名字、いかにも仮想世界にピッタリじゃないか、それに遥で漢字二文字！どうよ！なかなか味のある名前だろう？」

あつそう、あまりの下らなさに思わず口にする所だった。危ない危ない、未来君は休日の度に自作のライトノベルを書いてわざわざ僕に読ませたり、話して聞かせたりするんだけど一度だけ聞き流しながら、あつそう、と言っちゃった時、烈火のごとく怒り出し、宥めるのが大変だった。なのでしつかり考えて返答する。それに今ではどんな話でも聞き逃す事は出来ないし。

「確かに空想の人物って感じがするけど、それじゃ現実味が薄れてファンタジックになるんじゃない？」

冷静に指摘すると未来君はそこで考えを変えたのか、なるほど、確かにとしきりに頷く。未来君って自分勝手な所が目立つけど、しつかり人の意見を素直に聞くから僕も趣味に付き合ってもらえるんだよね。本を読むのは好きだし。

「それは都の言うとおりだな、だったら今度は楠木都くすのぎ みづって名前を使うよ。」

なんで僕の名前なんだよ。

しかもフルネーム

「未来君、あんまり身近の人の名前を使っていると、その使われている人は嫌な気分になるよ。っていうか昔一回使ったよね？」

覚えてないだろうけど。

「え？使った覚えは無いけど……嫌なのか？」

「そりゃ嫌だよ！」

全くこのボンクラは何を考えているのだろうか……

「なんだよりアリティにしろって言ったくせに」

どんな納得の仕方だよ、ていうかなんで不貞腐れるのかなあ、振り回されてるの僕なのに。

とむくれていると、朝のHRの時間になり、教室の扉が開いた。

どうやらずいぶん話し込んでいたようだ、ああ僕の貴重な睡眠時

間があ（泣）

ガラガラ

「おらー席につけーって皆座ってるか、ふん、感心、感心」

僕と未来君が不貞腐れると同時に担任の佐倉さくら旋衛せんえ先生が入ってきた。佐倉先生は数学教師で今年で三十歳の若い先生なんだけど、身体がどう見ても体育教師としか思えないくらい物凄くマッチョメンだ。何故体育教師ではないのだろう？（この学校に七不思議があれば採用されるだろうに）その見た目どおり言葉遣いは荒いけど、そんな外見に反してとても優しく、生徒に甘い先生で怒った所は一度も見ていない。

もちろん生徒からは人気がある。

「よし、欠席はいねえな、ん？赤碕が来てない？珍しい事もあるもんだな、まあいつか、それよりお前らあ、朗報だ。今日この二ーBに転校生がやって来たぞ」

え？梅雨になったばかりのこの時期に転校生？親の転勤かなんかな？無い事もないだろうけど、こんな田舎に来るなんてよっぽど珍しい事だな。いや、田舎だからこそ転勤させられるのかな？うん……わかんないや。

ガタツ

「せんせー、男の娘ですか？女の子ですか？」

勢いよく立ち上がってここぞとばかりに質問したのはクラスで普段は目立たない男子、鈴樹すずき君だった。というか男の娘って何？何故か寒気がするんだけど。

「喜べ、女の子だ」

男の娘はスルーされたようだ。一般的にその質問は普通なのかな？

「なんだ、女の子か……」

それと何故か鈴樹君のテンションが下がった。いや彼がガツカリした理由が分からない。それになんでチラツと僕を見たの？

「お、来たみたいだな、よし入れ、……ん？何で赤碕までいるんだ？」
教室に入ってきたのは見知らぬ女子、つまり転校生ともう一人このクラスの一番の秀才、赤碕静あかさき しずかさんだった。

「登校してくる途中で迷子になってるコイツの面倒みながら来たんです」

赤碕さんは後ろで申し訳なさそうにしきりに謝る転校生を一瞥した。

あれ？先生が廊下で待たせていたんじゃないの？

不審に思い佐倉先生を見ると……

「時間になつても来ないから何の演出かと思つていたんだが……迷子だったのか」

おいおいおいこの不良教師！！なんで約束の時間に転校生が来ないのを演出だと考えるんだよ！！

「……まあそう思うよねえ」「……」

いやいやいやいやなんでクラスの皆さんは納得してるの！？下手したらつていうか赤碕さんがいなかったら今教室で転校生と会えたかどうか分かんないよ！！

「はい、これが家の敷地内に居たので仕方なく案内してきましたんです」
駄目だ、完全に流されてる。

……ま、別にいいかな、僕に関係のあることでもないし。
「ごめんなさい、赤碕さん」

その転校生は下げた頭も上げずに赤碕さんに謝っている。

災難だな転校生、赤碕さんは他人にも自分にも厳しい人で言葉がきついし一緒にいると何かと疲れる、でも自分が遅刻してまでも人の面倒をみる、優しい人だったりもするんだけど。

「そうか、なら赤碕は遅刻にはしないでおくよ、他の先生には内緒だぞ」

甘いな先生。ばれたら退職させられるんじゃないかな？

「別にそんな事する必用はありません」

強情だな赤碕さん。相変わらずの優等生だ。

「あの、自己紹介……してもいいですか？」

すっかり蚊帳の外だな転校生。……あらためてよく見ると結構可愛いな、目はパッチリしててショートヘアも似合っていて元気なスポーツ少女って感じがして。

「ああ、スマン、とりあえず赤碕は席に座れ、改めて今日から二一Bに転校した日向未来さんだ」

そう言いながら先生は黒板に名前を書く。

「親の事情でこちらに引越してきた日向未来です、よろしく」

ざわざわっっ！！（クラス中がこっちを向く音）

クラスが一齐に僕の隣の席、未来君の席を見た。……えーと？ひなたみく？……未来君と同姓同名！？……読み方違うけど。

「いやあ先生もビックリだ、まさか日向と同じ漢字の名前の奴がこのクラスになるなんて」

僕は隣の席の未来君を見ると何故かニヒルに笑っていた。

「ネタだな、三流の、俺だったらもつと面白く出来る」

彼は何故現実と張り合っているのだろうか？確かに面白くないけど。どつちも

「席はそうだな、楠木から一つずつ後ろに下がれ」

……佐倉先生……もしかして、その転校生の席を未来君の隣にす

るの？

「で日向ひなたは空いた席に座れ」

うん、やっぱりか。なんて漫画チックなんだろう、まるで面白くはないけど。

「ふう、四流のネタだな」

だから何と張り合ってるの未来君？

「よろしくね、日向ひなた君」

気がつくと転校生は席に着き未来君に挨拶していた、それに対して未来君もよろしくと返した。元気で陽気な印象のその転校生とのファーストコンタクトはすごくグダグダだった。そのせいでこの時の僕はまだ気付けずにいた。一つの違和感に。

N o s i s t e r N o b r o t h e r 2 (後書き)

こちらがこの話の現実です。

一つずつ交互に投稿していきます。

No s i s t e r No b r o t h e r s

「……それで景人はラブレターを書いたけど渡し損ねて、それに気づかずにここで相沢さんを待っていたの？」

「はい、その通りでございます」

結局、僕はあの後、遙を呼び止めて全てを話してしまった。ちきしよう、一体どこで間違えたんだ。ラッキーアイテムを持ち歩いてなかったからか!?

「プツクク……」

「おまつ！笑ったな！笑いやがったな！！人の失敗を笑う奴なんて犬に噛まれて死んぢまええ！！！」

大激怒している僕の顔を見ながら遙はおなかを抱えて笑い出す。

「ぷつくく、ふふふ、ご、ごめつ、ぷっあははははははははははお腹…痛、…あはははははははははは…ごほっごほっ、十世代だつて、ふふふつ、く、くるし…ごほっごほ…けい…と…かお…まっか……」

「てめえ！謝る気ねえだろ！つてか笑いすぎだあ！」

笑いすぎて過呼吸をおこしてる遙に向かって怒鳴りつけた。顔が赤くなつてしまったのは怒っているからです。決して恥ずかしいからではありません。勘違いすんなよ！！

（三分後）

「ふうすつきりした」

笑いすぎて涙まで流している遙に対して僕は体操座りで地面にの字を書きながらいじけていた。

この時間ここは完全に無人なので（だから告白や喧嘩などでよく

使われる)人目を気にせずにいじける事が出来た。

「なんだってこんなミスをしちまったんだ僕は」

真剣に頭を抱える僕にまだニヤケ顔の遙がボソツと言う。

「ま、景人らしいっちゃんらしいけど……」

何だそりゃ、いったいコヤツは僕にどんなイメージを持ってるんだ？

「僕らしいって何だよ!？」

その問いに遙は余裕の表情で答える。

「レタスと白菜を間違えるのが貴方らしさよ」

「間違ツツツ……た…事もあるけど、それ五歳の時だろうが!！」

なんて昔の事を掘り返してくるんだ!恐るべし幼馴染!!

そんなツツコミに対してさらに昔を思い出すような表情になって
「懐かしいな…農場見学の時に一人『あれがレタスだよ』って自信
満々で言っつて農家の人に白菜だつて言われた時の景人の顔……」

!!!!!!!!!!!!!!

「やめてえ!それ以上言わないで!！」

誰にも聞かれてないのに恥ずかしい!!超恥ずかしい!!!!!!!!!!

「そんなアホらしさが、景人!貴方なのよ!！」

少し芝居がかった言い方をする遙を見て、少し頭が覚めた。

ああ、またからかわれたよ……。

「どーせ僕はアホな子ですよーだ」

諦めて開き直った僕に遙は、頭をポンポンと叩き優しく笑いながら

「やっと自覚できたんだね、お姉さん感激」
追い討ちをかけてきやがった。

「てめえ！いい加減にしやがれ！」

凹んでいるのに追い討ちしてきた遙の頭に置かれている手を強く掴んで立ち上がった。そしてそのまま自分のほうに引き寄せる。

「え？ちよ…まって…」

ふん、ざまあみ……あれ？遙ってこんなにでかかったっけ、……しまった、こいつ、僕より背が高い、つまり

「ちよ…おま……倒れてくんなあ！」

引き寄せたまま支えきれずに僕のほうに倒れてきた。

「引っ張ってんのそっちでしょー！」

どつて〜ん

とりあえず僕は遙を地面にぶつけないよう自分が下敷きに（元々下だけど）なるように倒れた。

うう〜めっちや背中痛いようう。

「痛ったあ〜…」

ん、何か顔に温かい空気が当たる、転んだ拍子できつく目を瞑っていた僕はゆっくりと目を開けた。

「……………」

一寸先の遙と目がバッチり合いました。遙は鳩が豆鉄砲をくらったような顔をしている。

……………ええとなんだっけ？こついう時はどうするんだっけ？……………確

かアメリカのドラマとかだと熱いキツ……

「っじゃなくて！近い！近いよ遙！さっさと起きて！？」

慌てて起き上がるうとするけど遙が邪魔で起き上がれない。と、その時破滅の声エンジェルボイスが聞こえた。

「こ、こんな所で！？なんて大胆なの？」

……ちよつと待てえ、なんでだ！？なんで彼女がここに？なんだって相沢さんがこんなタイミングで現れるんだよお！！神様あ！居るならでてきやがれえ！！鼻っ面へし折つてやるう！

「こ、誤解だ相川さん！これは事故なんだあ！」

僕の魂の叫びがどう伝わったのか分からないけど相川さんは何かを悟ったように一人でぶつぶつと呟きながら

「そつよね、若いつてこつういふ事もあるんだよね」

と、しきりに納得していた。というか自己暗示していた。そんな慌てる姿も可愛いぜちきしよう！そしてようやく遙の下から這い出た僕はパニックをおこしている相沢さんに突っ込みをいれる。

「相沢さん、落ち着いて聞いてね、これは不慮の事故なんだよ！！僕は潔癖さ、なんだつてこんなDS女に興味なんて……」

僕はやつと立ち上がった遙を指差して身の潔白を訴えようとして数秒後、自分の失言に気付いた。

振り返ると……般若が立っていました。

あ……死んだこれ

「景人の……景人の……ツツバカアアア！！！！」

ツパアアアアン

鋭いピンタがとんで来ました。

……あれ？目の前が真っ白に……

夢を見ていた、そんな気がする。目を開けたら朝だった。窓からは光が差していて、外では小鳥がチュンチュンと小さな演奏会が聞こえる、自分の部屋なのだが何故かベッドではなく机に座っていて目の前に『相沢さんへ』と書かれた新品の青い便箋と真っ白な手紙がある。部屋にはコミック等が詰まった本棚と衣装ケースやノートパソコンがある、いつもどおりの自分の部屋だった。

左手に違和感を感じて、見てみるとみると蚊に刺された痕があるだけだった。

ボリボリボリ（左手を掻く音）

えっと、つまり

N o s i s t e r N o b r o t h e r s (後書き)

短くてすみません。

この二人の会話が思いつかなくて…

N o s i s t e r N o b r o t h e r 4 (前書き)

は作者の言葉です

No sister No brother 4

「夢かよっつ!!」

あれだけ意味深な書き出しから始まって全部夢かよ！納得いかない!!!

僕は昼休みのクラスで未来君の書いたライトノベルの続きを読んでいた。……だけどあんまりな展開に僕は大声で突っ込んでしまった。

周りの目も気にせずに。

「楠木、うるさい」

そしたら自習をしていた赤碕さんに睨まれてしまった。

納得いかないけど赤碕さんは悪くないので、とりあえず謝る。

「ごめんなさい」

すると赤碕さんは何も言わずにまた自習に戻る。

どうでもいいけど赤碕さんって休み時間は勉強しているところしか見えないな、なんて思考をそらすと

「いくら面白いからってそんなに興奮するなよ」

満足そうな笑顔でふざけた事を言う未来君の言葉でこっちに帰る。なんてムカつく解釈の仕方なんだろう、ぶん殴っていいかな？

グーで

「なあんだ、夢だったんだ、なんか残念」

未来君を殴ろうと腰を浮かせた僕は横から声がして、そっちを向くと転校生の日向さんが未来君のライトノベルと呼ぶにはお粗末なものを読んでいた。あれを強要されずに読めるなんてずいぶん神経が太い人だな。

「とういかなんで日向さんも読んでるの？」

未来君の席の隣で『え？今さら？』とでも言いたげな表情で僕を見る。いや、だってね、未来君のライトノベルを読むのって体力と

集中力使うんだよ、主に突っ込みで。

「隣の席と後ろの席の人が朝から自作の小説の話ばかりするから、気になって日向君ひゅうがに読ましてもらったの。そしたら中々面白くてね」

何……だつ……て。

面白い？

これが！？

「ふん、これが一般的な意見という事だなクスノキ君」

斜めの席でたった一人の支持を受けただけの未来君がふんぞり返って言う。

確かに世の中にはいろんな感性を持つ人がいる、でも未来君の書いた小説を面白いと思う人なんて万人に一人くらいのもだろう、そしてそれがたまたま日向さんだったというだけの事だろう。

けどそれでも認めたくないものだってある。これが……若さ故の……いや自己嫌悪はやめておこう。

「……どうせ万人受けしないさ……」

「なんでそんな事言うの？みゃー君」

僕の苦し紛れの嫌味を否定する声がある。それは予想外の人物だった。

「鳩子ちゃんまで……」

クラス……いや学校一かな？先月の図書室ランキングで四十二冊の本が貸し出しされて名前が貼ってあったし（さらに市の図書館からも借りている）……の読書家の鳩子ちゃんがこっちに来た。

鳩子ちゃんと僕は……再従兄妹さいじゅうがいまいで ダジャレではない……幼稚園の頃からよく一緒に遊んでいて愛称で呼び合う仲だ、中学生になってからは少し疎遠気味になってたんだけど、いきなり会話にはいつて来るなんて、どういう風の吹き回しなのかな？そして気がついたら四面楚歌だった。どうして僕の周りには一般的な感性を持つ人がいないんだらう？

「ええと、楠木君……だっけ、君ってなんか偏見が強くてガンコだよね」

日向さんは今朝の未来君みたいにフーヤレヤレと溜息をつく(まさ)に今朝の再現)、どうやら日向未来という人種は僕と相性が悪いらしい。

めっちゃムカつく。

「もういいや、だったらもう読まないさ」

言い返すのもアホらしいので相手にしないことにした。どうせまた読まずにはいらなくなるんだろっけど、今くらいは拗ねたっていいだろう。

「みゃー君って昔からこうだから、私のすすめる本もあんまり読んでくれないし」

呆れたように鳩子ちゃんが呟く、それは聞き捨てなら無いな。

「ちよつと待てや、よんで数ページ目からのセリフが『お兄様、お兄様、お兄様』ってひたすら連呼する本(夢野久著作 ドグラ・マグラ)なんて読めるか!実際に妹がいるんだぞ!嫌な想像しちゃうじゃねえか!」 ドグラ・マグラファンの方、申し訳ございません。

自分のキャラを忘れて思わず再度大声を出してしまった。

「楠木!うつさい!」

後ろから赤崎さんが投げたシャープペンシルが飛んできて背中に刺さる。

痛くないけど、クラスメイトの視線が痛い、敵がどんどん増える僕、誰か味方してください。

バーーーーー

そんな事を考えたのがいけなかったのかな、いきなりクラスの扉が勢いよく開きそいつは登場した。

……ああ、面倒臭いのが来ちゃったよ。

「呼んだかい？愛しのマイハニー」

隣のクラスの2-Aの美男子、窓辺渡君だ。まどへわたる彼はスポーツ万能で成績優秀、そして眉目秀丽、なのに……

「キミの心の声を聞いて駆けつけてきたんだヨ！都、これもボク達の愛の成せる業サ！」

物凄く残念なガチホモ野郎なのだった。

「……………キモ……………」

日向さんが呟いた。よかった、渡君は黙ってさえいれば万能美少年なので勿論最初は女子から凄くモテるんだけど、彼の本性を知ると……大概の人がシヨックを受けちゃうんだよね。だから初対面の内に彼の本性を見れた日向さんはラッキーな方だと思う。

ま、関わっただけで十分アンラッキーなんだけどね。

「呼んでないよ渡君、だからさっさと自分のクラスに帰ってね」
下手に出ると渡君は付け上がってくるので、できるだけ冷たく言うんだけど、それをどう解釈したのかな？めっちゃうちゃ嬉しそうな顔をしながら渡君は頷いた。

「そうかい、ボクが来た時点でキミの問題は解決したんだネ！では退散するヨ！」

確かに鳩子ちゃんは自分の席で我関せずといったように読書していて、赤碕さんはうるさ過ぎて教室から出て行き、日向未来コンビは呆れていてポカーンとしている。周りのクラスメイトにいたっては白々しく世間話を始めた、どうやら皆も渡君と関わりたくないようだ。ま、おかげで助かったけど……

認めたくない！

渡君は出てきた時と同じように騒々しく教室から出て行き、その後面倒臭くなったのか未来君達は僕に何も言っただけで来なくて、日向さ

んと仲良く話していた。

全く、今日は厄日だ。

その後、放課後まで僕は未来君と一言も話す事は無かった。だからどうしたって訳でもないけど。一つ、今日の教訓、面倒事というのは団体でやって来るのだ。

迷惑な事に。

「この時を待っていたヨ、マイハニイイイ！」

六時間目が終わった直後に渡君が現れた。もういいよ、君の出演は一日一回で十分なんだよ。だから引つ込めよ。

「今日こそ一緒にかえ！グボハアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

大きく振りかぶって、渡君の鳩尾に渾身の右フックをぶち込む。ああ、やかましいなこいつ。少しして大人しくなった渡君の耳元で優しく囁く。

「渡君は部活があるでしょ、さっさと行って来たら、期待のエースなんでしょ？」

こうすると渡君は目を輝かせながら一瞬で消えてくれる。周りでクラスメイトがひそひそと話す声も気にしちやいられない。

こっちだって必死なのだ。

「分かったヨ、愛するキミがそう言うなら、ボクは行って来るサ！」
激しく痛むであろうお腹を押さえもせず、凄まじい勢いで渡君はグラウンドへと向かった。さっさと行っちまえ、そして出来れば逝っちまえ。

そんな黒いことを考えているとまだクラスに残っていた鳩子ちゃんに寄ってきた。

「ねえみゃー君、実は彼とデキてたりする？」

「え？」

一部始終を見ていた鳩子ちゃんがとんでもない事を言い出した。それに対し、僕は大きなくらい全身で否定のアピールをする。そんな勘違い、あつてはいけない。

「何言ってるの鳩子ちゃん？あんなの付き合っているなんて、未来君と付き合う方がマシだよ」

ざわざわざわ！？（クラス中が僕を見る音）

ひそひそひそ！？（クラス中が囁きあう音）

????????（全身アピール男の反応）

えつと僕、何か変な事を言ったかな？ちゃんと渡君とは何にも無いって言ったよね？なのに目の前の鳩子ちゃんは目を見開いて顔を真っ赤にしている。なんで？

「みゃー君って……その……ホモ………なの？」
その瞬間、思考が止まった。

「ほ？もけ？………%e3%82%ae%e3%83%a3%e3%82%b0%e3%83%9e%e3%83%b3%e3%82%ae6%97%a5%e5%92%8c%e80%80%e8%81%9………???」 文字化けではありません

「あの、みゃー君？大丈夫？」

あ、やべ、なんか電子世界の向こう側にDIVEしてた。いけない、いけない………っじゃなくて！何で僕がホモなんだよっ！

「鳩子ちゃん、君はとてつもない勘違いをしている、僕は決してホモなんかじゃない！ってというか同性愛なんて認めない。僕はちゃん

と女性が好きな普通の男だよ」

鳩子ちゃんの肩を掴み、力説する僕。周りからひそひそと話す声が聞こえるけど、気にしちゃうられない。これだけは訂正しておかないと。

「でもさつき、渡君と付き合うより未来君と付き合うほうがいいて」

……なんて間違った解釈の仕方なんだろう。

「その付き合うは未来君の書くライトノベルを書く事に付き合っつて意味だっただけ……ええと、つまりは、面倒事に付き合っつて意味で言ったの」

はあ、今未来君が教室に居なくてよかった。HR後に未来君は続きを書いたため図書室に向かっていた。これを聞かれたらもう自作のライトノベルを読ませてくれなくなるだろう。

「……そっかあごめんね、変な事言っつて……」

そうして安心したように鳩子ちゃんは一息ついた。危ない危ない、根も葉もない噂が流れる所だった。

チツ（クラスメイトが一齐に舌打ちした音）

「お前達は一体、僕に何を望んでいるんだあ！」

いじめだ！クラス単位でのいじめだあ！助けて佐倉先生！

「期待させやがってええ、この女顔があ！」

誰だ！人の気にしてる事をオブラートにも包まずにダイレクトに僕の心を的確にえぐってくる奴は！ん？あれ、鈴樹君？なんか、泣いてる？

「信じていたのに、信じていたのに、楠木は男の娘だと信じていたのに！！！」

いつもは大人しくてクールなクラスメイトの豹変振りに全く着いていけない僕がそこにいた。……じゃなくて。

なるほど、こいつは渡君と同類か、なら簡単だ。

ゴスッ（僕が鈴樹君の鳩尾を殴る音）

ドサッ（鈴樹君が倒れる音）

ペッ（それに僕が唾を吐く音）

「さて帰ろう」

パンパンと手を払いながら僕は啞然として誰も動かない教室を去ろうとすると。

「よう楠木、元気いいなあ」

いつも通りの笑顔の佐倉先生が現れた。何故か右手にロープを持って。そして視界の隅には何故か幸せそうな鈴樹君の顔が見えた。幻覚であると信じたい。

もう…嫌だ……

その後、お縄を頂戴した僕は職員室に強制連行され、くどくどと三十分間説教を受け、さらに反省文五枚を言い渡された。普段温厚な佐倉先生があんなに怒るなんて、僕、何か悪い事したかなあ？ 思いつきりしてます。とツツコミを入れてくれる人が誰もいない教室で僕は溜息をついた。

「あれ？楠木、何でいるの？」

「ああん？誰だ、放課後にわざわざ教室に来るアホは…って赤碕さん？」

「どうしたの赤崎さん」

「あからさまに顔をしかめている赤崎さんは面倒臭そうに僕を見る。彼女が不機嫌な原因は間違いなく昼休みの事だろうけど、そんなに僕は悪い事をしたとは思えない。とりあえず適当に流して刺激しないようにしよう。」

「先に質問してるのはこっち、先に答えなさい」
ちっ、言いたくないのに。

「未来君の書いたライトノベルの添削してる」
言いたくないから適当に嘘をついた。

皆もよくあるよね言いたくない事を隠すために付く嘘って。

「あんた達って仲いいのかわいのか悪いのか分かんないわね」
上手く誤魔化せたようだった。

「別に仲がいいわけじゃないよ、興味本位で話しかけたら、いつの間にか付き合わされちゃってるだけさ」

実際後悔はしている。

「それでもホントに嫌なら付き合わないでしょ、やっぱり楠木ってあれなの……ええとホモ？」

まだそのネタを引く張るのか、ん？いや待てよ。

「何で、赤崎さんがその事知ってるの？」

……ん、あれ？

自分で言った言葉に違和感を感じた。そして赤崎さんが目を見開いて……マジ……なの？……という眩きが漏れて、自分の失言に気付いた。今の答え方ではまるで僕がホモであることを言い当てられたみたいじゃないか。

「いや、今の言葉は、その、さっきそいう話題があっただけで、別に僕は男が好きなのではなくて……」

「……………」

必死で弁解してみるも、赤崎さんは黙って俯いているだけだった。ええい、なんで一日に二回もホモ疑惑の弁解しなくちゃいけないんだ！

「赤崎さんがそんな事言い出すとは思えなくて、つい……その、言葉のあやで……」

「……………」
必死で弁解を続けてみるも、やはり赤崎さんは僕から目を背けて
いる。

「その、あれだ、いい間違えってどうか……………」
(以下同文)

「……………」

「あ、あのね、ぼ、ぼくはね……………」

あ、とうとう舌が回らなくなってきた……………
口もからからになって、嫌な汗を感じる。
ああもうヤダ……………

「もういいよ」

「へ？」

俯いていた赤崎さんが顔を上げながらそう言った。
あれ、笑ってる？

「あんた達の会話、廊下にまで響いてたから知ってるよ、今は昼
休みの仕返し」

な、なんだそりやああ

脱力した僕を尻目にクスクス笑いながら赤崎さんはそういえばと
呟く。

「さつき西燕……………じゃなかった日向が日向を探してたけど居場所、分
かる？」

うん？今聞き逃せない単語が出たぞ。

「赤崎さん、その西燕って何」

「だから、先に質問してるのはこっち、あんたが先に答えなさい」
こ、この子めんどくせえ！

「未来君はこの時間ならまだ図書室にいるよ、っていうか赤崎さんが知ってどうするの？」

その質問はポケットから取り出した携帯電話を見て、なるほどと納得した。

「西燕ってのはあの子が今朝会った時に私にそう名乗ったの、すぐに訂正したけどね」

なるほどね、親の事情で転校してきた……か。

僕の妹も中々複雑な事情があるから人事とは思えないな。

「本人には言わないでね？理由は分かると思うけど」

赤崎さんは釘を刺すように僕を睨みつけて教室から出て行った。

そういえば、彼女は何をしに教室に来たのかな？結局聞けず終いだっだし、まあ何かの伏線じゃないといいけど。

と、それはともかく反省文も書き終わったし、さっさと提出してかーえろつと。

「その前に、やることがあるでしょ？」

今度こそ、と荷物をまとめて教室を出た僕に追撃の一言が浴びせられた。

…ええと、なんで学校（こ）に居るのかな？ちゃんと屋敷（い）で大人しくしてろとあれだけ言ったのに。

「やることって何だよ？…ユウキ」

振り向くとそこには金髪碧眼で白いワンピースを着た、まるでビスクドール（西洋人形）のような少女がロリポップキャンディを持って立っていた。

味なんて分からないだろうに。

「あの人の書いた筋書き、まだ全部読んでないんでしょ？」
「うち、やっぱりお見通しか。」

「いいんだよ今日は、夢オチだったし」
投げやりに答えるとユウキは虫けらを見るような目（相手を馬鹿にしきつた目）で僕を見た。

「それってつまり、現実の事は何も分かっていないって事じゃないの？」

「……ああ、そっか。」

「でも今回は大した事無いと思うよ、主人公が馬鹿だし」

「あの人の小説って話の前半と後半がかみ合っていないってこの前言ってたでしょ、そんな夢の部分だけでその物語の何が分かるの？」

まあたしかにその通りなんだけど、今はちょっと未来君に話しかけるのは気まずいというか……ええい、分かったよ行ってくるよ、行けばいいんだろ！」

「あなたがサポートしろって言ったんでしょ？」

「はいはいその通りですよ、確かに言いました。」

もう、僕以外に理不尽な不幸に悩まされる人なんて見たくないし。

「よし、それでこそあたしの人形ね」

「お互い様だろ」

この人形遣い（パペッター）女

そつと本音を心で呟き僕は図書室へと歩き出した。

「なんて奇跡、なんて幸福、都がボクを待っていてくれ…バフウウウウウツ！！！！！！」

何も見えない、何も聞こえない………うん、OK図書室に行こう。

「時々思うんだけど、あなたってすぐ暴力行為に走るわね」

まだ居たのか、ユウキ。

「なんの事だい？」

足元に転がる体中が凸凹した物体を足で小突きながら笑顔で聞く。ユウキは、ドン引きしていた。いやいや僕がユウキにされた事に比べれば可愛いもんだと思うけど？

「ええと……何かごめん」

いきなり謝られた、頭でも打ったのかな？心配だ。

なんてふざけるのもここまでにして。

「別にユウキが気にする事なんてない、元々僕たちは同じ被害者だからね」

あの男のね。

「じゃ、もう行くから、寄り道せずに真っ直ぐ帰れよ」

「うん」

ユウキが視界からいなくなったことを確認すると再び図書室へと歩き出した。

はあ、気が進まないな。

「あれ？みゃー君？」

図書室の前に着くと中から鳩子ちゃんが現れた。

No sister No brothers

あゝ、朝から最悪の気分だ。

「誰だよ、鳳遥って」

僕にそんな幼馴染いねえっての。

「にしても、妙にリアルな夢だったな」

誰も居ない四畳半の部屋で一人、咳く。家には母さんと僕しか居ないし、その母さんもパートに朝早く出かけてしまっているのは僕一人だ。

キッチンにはトーストとスクランブルエッグが用意されていた。

これくらい自分で用意するのに。

朝早くにパートに出かけているのにも関わらず、母さんは毎日しつかり僕の朝食を用意してくれる。家は裕福なほうではないし、父親もいない…というか合った事すらない、その事を一度母さんに聞こうとした事があるけど、母さんは辛そうに目を伏せるだけで何も語ってくれなかった。

でもこうしてしつかりと僕を育ててくれている母さんを困らせたくは無いから僕は父さんの事について聞く事はしなくなった。

そして今では少しでも母さんの負担を減らすためにクラスの皆が当たり前のように持っているケータイを持っていなかったり（なのでメールも出来ない）、バイトを掛け持ちしたり（バイトの掛け持ちについては母さんには内緒だ）と頑張っている。

ま、今一番頑張っている事といえば……相沢さんへのアタックかな？

「さて学校行くか」

とは言っても結局一週間前から書こうとしている相沢さんへの手紙は未完のままだ。自分のことながら情けないと思う。

でも仕方ないじゃないか！彼女の魅力と僕の想いを文にするなんて考えるだけで赤面モノだよ。って今時ラブレターというのも古い

かな？でも僕ケータイ持ってないからメールも出来ないし、なんて諦めた思考をする今日この頃……：というかあの夢って僕が告白しようとしても失敗するって思ってるから見たのかなあ？
だとしたら僕はとてつもなくヘタレだ。

「駄目だな、僕」

そう呟いた矢先に目の前の丁路地から同級生が現れた。

「ああ、その通り！お前は駄目な奴だよ、景人」

はあ、朝から面倒な奴と出くわしたよ。

「黙れよ善之助」

隣でケラケラ笑いながら現れた、悪友の掌善之助てのからせのすけに軽くチョップする。

「いや、黙らないぞ、こうやってお前を挑発してやらないといつまでたっても相沢に告白なんて出来ないだろ？」

「いらねえお世話だ」

少しは落ち着かせてくれよ、こちらら今朝から変な夢見てブルーなんだから。

「バカとは失礼な奴だな、ヘタレのくせに」

ふん、実際お前はバカだろう、……………僕も十分ヘタレだけど……………

「それにしても善之助のバカさ加減は上限が無いよな、一昨日のグラマー（英語の文法）の授業で指名された時の答えが古典の源氏物語の和訳だったよな？」

「それは古典の授業中に寝てて起きたらグラマーだったんだよ」
それはオカシイぞ

「グラマーの前の授業が数学でその前が世界史……………古典って一限目だったよな？」

つまり善之助は三時間近く、一度も起きることなく寝続けたという事だ。

うん、バカだね

「なるほど、だからあの時、腹が空いてたわけだ」

「何やら今さらながらに気付いたようだった。」

「やっぱりバカだね」

「それはそうと景人、先週の掃除当番の時に相沢と一緒にだったのに何で一言、二言しか喋らねえんだよ、俺の聞いた限り『チリトリとって』と『お疲れ』しか言わなかったらどう？」

「何で知ってんの!？」

「う、うるさい!あの時は……充電切れだったんだ!！」

「何だ、お前は太陽光でも浴びて動いてるのか？」

「苦しい言い訳に対してバカな善之助らしくかめまともな突っ込みに僕は唸るけど、一度アホな事を言っているので言い返しにくい。」

「そんな下らない言い合いをしていると校門が見えてきた。」

「なあ景人、思ったんだけどさあ」

「珍しく善之助が真面目な声で前置きする。と言ってもどうせ下らない事なんだろうけど。」

「何さ、改まって」

「ただど茶化すような事はしない、もし真剣な話だったら彼に失礼だからね。」

「俺達つてさあ、……毎朝同じ話題でよく飽きないよなあ」

「それ、お前が言うなよ。」

「毎朝善之助が同じ話題を振ってくるだけだろうが」

「面倒だけど付き合ってるんだよ僕は！」

「ああだからか、お前も良く付き合ってくれるな……と、あれ、相沢じゃね？」

「善之助がふと明後日の方向を見た。」

「え?どこどこ!！」

「慌てて周りを見渡すけど、相沢さんの姿は見えない。」

「てめえ、謀つたな!!!」

ホラ吹きが悪友目掛けて拳を握り振り上げた、その時

「おつはよー！今日も元気だね、木場君^{きは}」

後ろから発せられたエンジェルボイスによって動きが止まった。
そしてゆっくりと振り返ると僕の片思いの相手である相沢菜子さんがいた。

「あ、相沢さん!?……お、おはっ……おはよう……」

急に滑りの悪くなった舌でかろうじて挨拶を返すと相沢さんは小さく笑い、じゃあねといって校舎に入ってしまった。

「……か……」

「か?」

「可愛すぎるううううううううううううううううううううううううううううううう!!!」

登校途中の校門付近という事も忘れて僕は絶叫していた。そして気がついたら僕の半径4メートル付近に人垣ができ、全員が変な目で僕を見ていた。

「さっさと行くぞ」

状況がよく分からないまま善之助に引つ張られ、そそくさと校舎に入った。

「景人、あんな人の多い場所で叫ぶなよ、恥ずかしいな、今日の昼には有名人だぞ」

「うん、ごめん」

下駄箱を過ぎたあたりで善之助に平謝りしているといきなり肩を叩かれた。

「お前も度胸があるのか無いのか分からん奴だな、景人」

聞き慣れた声がして振り返ると、毎朝遅刻すれすれで登校して来る幼馴染の平地悠我さかなし ゆうががいた。

「あれ？悠我、今日は早いんだな」

珍しい事もあるもんだいつも予鈴すれすれに登校してくるのに。

「まあな、なんか妙な夢を見て飛び起きたんだよ」

こいつもか

「妙な夢？それってどんな内容なんだ？」

善之助が好奇心をむき出しで尋ねる。

遠慮無い奴って良いなあ…

無神経になるつもりは無いけど。

「それがなあ、信じられない内容でさあ……なんと……」

バコッ！！

「勿体ぶんな、さつさと言え」

善之助……容赦ねえなあ、悠我……涙目になっでんじゃん。

「ああハイハイ分かったよ、実はな……景人に妹が居たんだ」

………？

「しかもな、景人とその妹が仲良くてさ、もう見ていられないくらいベタベタしてて気味悪くなって飛び起きたんだ」

何……ソレ？

I・M O・U・T O？

「なんとも……突拍子も無い夢だな……お前の頭の中どうなってんだ？」

呆れたように善之助が言う。

そうだ、僕に妹なんて突拍子無さ過ぎる。

別に僕は妹が欲しいとか小さい子が好きとか言った覚えが無いし。

シングルマザーだし。

兄妹なんて単語、僕には無縁なのだから。

「そうなんだよな、寝る前に『MASK THE HERO BIKEMAN BEE TL』を見てたからかな？」

なんで5、6年くらい前の特撮ヒーローなんて見てるんだよ！

M A S K T H E H E R O B I K E M A N（以後M T H B）は僕らが小学生の頃に流行った特撮ヒーローで主役が帰国子女の超イケメンだったので女子から大人気だったシリーズだ。

内容は確か……突如隕石が飛来してきてその隕石からエイリアンが出てきて、そいつらから地球を守るために組織が創られ、その組織が開発したパワースーツを装着した主人公がハイスピードで戦うんだけど実はその主人公はその隕石のせいで妹と生き別れているという感じのストーリーだったと思う。

「影響されやすいんだな、悠我は」

まあ突拍子もないけど夢ってそんなもんだよね。

「そうかもな、にしてもやっぱりあのシリーズが一番面白いな、今の

奴ってなんかデザインがカッコいいじゃなくて斬新って感じだし」
それについてはよく分からないな、この歳で特撮ヒーローなんて
見ないし。

「そうだよな、もう見た目がギャグにしか見えなくなってきてるよ
な」

善之助は今でも結構見てるらしい。

「今でも特撮ヒーローなんて見てるの？」

小馬鹿にした言い方にならないように気をつけて聞いてみると、
二人は真剣な顔になる。

「まあ確かに世間一般的には小学生向けってイメージがあるけど、
ストーリーは中々面白いし、キャストも可愛い子が結構出たりする、
主人公がイケメンだから女子も見ると需要はかなりあると思うよ」

これは悠我の弁

さらに

「最近はCG技術も発達してきているから、下手なアクション映画よ
りカッコよく見えるな」

こっちは善之助の弁

「へえ〜最近の特撮ヒーローって需要が広んだなあ」
全く知らなかった、ぶつちやけてしまえば要らない情報ではある
けど。

そんなこと言うては二人に悪いので自重しとこ。

「にしても去年の信号機みたいな配色のやつはまだカッコよかった
な」

「ああ、でもその前のやつもシンプルなデザインでカッコよかった
よ」

「それに比べて今の奴は……………」

二人は僕のついていけない話題を始めてそこそこ盛り上がって
いた。

それでも僕は特撮ヒーローものを見ようとは思わないんだけどね。
そんな事より今は相沢さんへの……………

「あ、今思いだしたんだけどさ、夢に出てきた景人がその妹を名前で呼んでたんだよな」

一人思考にふけっているとそんな言葉が聞こえた。

もちろん悠我の言葉だ。

「その名前って？」

善之助がさかさず質問した、これには僕も興味がある。

「その名前ってのは

N o s i s t e r N o b r o t h e r s (後 書 き)

最後の切れの悪い文章は仕様です

No s i s t e r No b r o t h e r 6

「もう帰っていいか？」

読んでいる途中の原稿用紙が横から未来君に抜き取られた。

「うんううう、もうちょっとだけ！」

今メツチャ重要なところだった！てか狙ってやってるんじゃないかな？

「ふう〜、そうか、じゃあ今日は貸すから明日感想聞かせてくれよ」

「うん、ありがと」

ユウキと分かれた後、図書室の前で本を返却して帰ろうとしていた鳩子ちゃんに会い、未来君が十分ほど前に図書室を出て市立図書館へ向かったと聞いて急いで追いかけて来たのだった。

そして市立図書館の個別ブースで原稿用紙と睨めっこしている未来君を発見し、偶然を装い近づき今に至る。

端折り過ぎ？確かにそうかもしれない。でもぶつちやけ、どんな会話をしてまた続きを読ましてもらえたか覚えてないんだよね。

「じゃあな、都」

未来君は荷物を整えると僕に軽く手を振り、帰っていった。そしてすぐに姿が見えなくなる。

ん、あれ？何か忘れてるような??

「ん~~~~」

ま、いつか

とりあえずこの原稿の続きを読むほうが先だな。

気合を入れて原稿に目を落とすと……

~~~~~

閉館を知らせる音楽が流れた。  
うん、帰ってからでいいかな。

「い・い・わ・け・な・い・で・しょ!!」

またか……今日は”またか”が多いな。

「耳をそんなに強く引つ張るなよ、千切れるだろユウキ」  
いつの間にか真横に立っていたユウキに囁く。

「あなたが怠慢な態度をとるからよ」

そんな理由で耳を失いたくない。

「仕方ないな、じゃあ続きは屋敷で読むよ」

この時間は図書館に人気が少ないけどユウキは見た目が目立って  
しょうがない。

ああ、中学二年生で帰宅拒否なんて僕って不良だな。

「そうね、それなら近いし」

はぁ行きたくないな。

## 人形屋敷

今から僕達が向かう屋敷は町の人々からそう呼ばれている。

理由は簡単、その屋敷には国籍を問わず、あらゆる人形が飾られていて余りにも不気味だからだ。

元々は都会の資産家がこの町で新しくビジネスを始めようとして建てた屋敷だったんだけど完成して数ヶ月でその資産家は病により亡くなり、身内も居なかったらしく、その屋敷の引き取り手が現れなかった。

結果、町はこの土地を利用するため屋敷を取り壊す事にしたのだが工事の度に土木関係者が行方不明になるという事件が発生して中止された。その屋敷にはその資産家の趣味だったのか大量の人形に埋め尽くされており、その後の怪談のネタになっていて、肝試しにも使われていたんだけど、今では老朽化が進み、いつ崩れるかわからないので近づく人は居なくなつた。

というホラ話で有名な屋敷だ。

実際はとある世界で唯一人の人物の別荘で、普通の人が入れば人形の館で、その主人が入れば現代チックな洋館になるといふ。摩訶不思議な建物である。

何故そうなるかといえばそれはこの館の主人がなんたつて……ねえ。

「やあ、よくきたね、都君、今日も良い子と会つたの？」

僕とユウキが屋敷に着くと妙齢の女性が出迎えてくれた。

上はタンクトップに下はジャージという今まさにエクササイズでもしていました、という格好だ。

汗一つかいていないけど。

「良い子かどうかは分かりませんが、クラスに転校生が来ました。……かがりさん、今日はアイツの筋書きをまだ読みきつてないんでちよつと場所借りていいですか？」

この屋敷の主人、かんがたりかがり神語篝さんに僕は頼んだ。

「いいよー、お茶飲む？」

ずいぶんとあっさりだな、今回もまた何か厄介ごとを僕に押し付ける気かな？

かがりさんは初めて会つた時に命を助けてもらつてから、何かと僕に厄介な頼みごとをしてくる。

「はい、お願いします」

屋敷の中に入ると外から見た時よりずいぶんと広い、いつも思っ  
けど全くどうなっているのやら？

そして二分ほどするとかがりさんがティーポットとカップをトレ  
ーに載せてきた。

「ご丁寧に、どうもありがとうございます」

そしてカップにお茶を注いだその時

「そんな事してる暇あるのかな？」

意味深なかがりさんの言葉で僕は動きを止めた。

「……どういう意味ですか？」

僕の質問に対してかがりさんはニコニコと笑いながら玄関を指差  
す。

バアアアアアアアアアアン

その時屋敷の玄関が勢いよく開かれた。  
もちろんユウキの仕業ではない。

「じつじつことよ」

そこに立っていたのはこの町には無い高校の制服を着た青年だっ  
た。

「なんで？ここは無人のハズなのに………」

その青年は目を丸くして僕たちを見る。確かにこの屋敷の明かり

は外には漏れないようになってるので人がいるとは思わなかったんだろう、変な噂もいっぱいあるし。

まあ明らかに不審者である、ここにいる全員。

片方は町でお化け屋敷扱いの場所に普通に住んでいて、片方はいきなり屋敷に侵入しようとした青年。

「くそっ！」

二秒ほど固まっていた青年は踵を返し、走り去って行った。

「ちよつと！！扉くらい、開けたら閉めなさいよ！」

そんな場違いなかがりさんの声で思考が回復した。

「な、なんだったんだ？今の人」

それでも動揺を隠せず思った事を言う。

「気付かなかつたの？今回の主人公じゃない」

……………え？

「あれが？……………木場景人？」

「そっか、本当に全然読んでないんだね？じゃあイメージをあなたの脳に直接送るね、もう読んでる時間なんてないし」

呆れた顔でそう言ったかがりさんは壁に掛けてあった箒を手に取った。

「Un Look! (制約解除)」

その瞬間筭から莫大な光が生まれた。

そして僕の脳裏に走馬灯のように物語が流れ込んでくる。

「嘘……そんな……ことって……」

それは、あまりにも……悲しい物語だった。

未来君はこんな話を考えていたなんて……それが……

現実であるとも知らずに

|||||

僕が始めて未来君と話した日が五月一日でその次の日、翌日には  
ゴールデンウィークの後半を控えていた五月二日に僕は一体の人形  
と出会った。

それがユウキだった。

ユウキは巧みな話術で僕を人形屋敷に連れ込み……

僕を人形にした。

ユウキは意志を持った人形であり、そして人形遣い（パペッター）  
だったのだ。

そして僕はユウキに操られるだけの人形になった。意志はあるの  
に思い通りに体が動かせず、二日間、生き地獄にあった。

そして五月五日にかがりさんが現れた。本人からすればゴールデ  
ンウィークを利用して（別に働いている訳ではなく【大型連休には  
別荘に行く】というイメージがあっただけ）別荘に来た。その程度  
理由だっただけ、それが僕の命を救った。

なんとって彼女は現代で唯一の魔法使いだったのだ

ユウキも人形屋敷が人気の無い廃墟で誰か持ち主がいたなんて知  
らなかった。

そして僕がかがりさんに助けられて、また人間に……は戻れな  
かった。

いや違うな、僕は戻らなかったんだ。

だって、僕が元に戻るにはユウキを壊さなきゃいけなかったから。

二日間、たったの二日間、一緒に過ごした人形の為に僕は自分の  
人生を捨てた。

何故ならユウキの人形でいる間、僕には体を操られる度に、彼女  
の感情と記憶が流れ込んできていたんだ。

それは彼女が人形になってから蓄積されてきた四百年以上にも及  
ぶ物語。

そしてユウキが元人間であったことも。

結局僕がかがりさんに反対されたけど、魔法で自分の意志で動け  
る自動人形オートマタになった。

人間の模型であり、成り損ないの姿、見たものはまるで画面の向  
こつのように聞いたものはスピーカーから流れたようなもの、そし  
て温度も分からない、そんな人形になってしまった。

もちろん辛いし、不便だし、人間に戻りたいと思う事もあるけど  
後悔だけはしていない。

そしてゴールデンウィーク最終日、五月六日に僕は人間として不自然に見えないように出来る事と出来ない事の検証でこの悪夢のゴールデンウィークを終えた（両親には大量に出た宿題の消化合宿という事で無理やり通した、かなり疑われたけど）。

だけど悪夢はここからだった。

五月七日、久々の登校日に僕は隣の席の未来君に話しかけられた。内容はこうだ。

「楠木、この前書いてた原稿、仕上がったんだけど読んでみないか？」

その時僕は特に何も思わずにその原稿用紙を受け取り、内容を読んだ。

そして嘔吐しそうになった。

いや人形だから吐くものなんて無いけど、その内容はまさに”僕とユウキ”が主人公の物語だった。

台詞も、経緯も、思考も全てがああのゴールデンウィークと一致していた。

その後、僕は体調不良で早退し、かがりさんの屋敷へ向かった。

かがりさんならこの怪奇現象を解明できると思ったから。

そして案の定かがりさんはその答えを知っていた。

「それは、あれだよ Seventh Writer だよ」

「せぶんすらいと？」

かがりさんの説明によると未来君はアカシックレコード？（だったと思う）と繋がっていて無自覚のうちに七日分（四日目を中心と



してその三日前と三日後）のこの町に住む人（またはそれに関係する人）の一人の言動と思考が頭に浮かぶらしい。

全く持つて意味不明な能力で何故そんなことを未来君が出来るかは、まだ分かっていない。そして未来君は悪くないんだろうけど彼がもしあんな事を書かなかつたら……と思う事もある。

そして、未来君はまた新たに物語を書き始めた。

一体誰が主役か分からない物語を

そしてその物語もまた悲劇であった……だがそれは二日後の出来事であり、まだ起こっていないかった。

そして新しい発見をする。

それは、僕が未来君の小説に干渉できるという事だった。

どうやら Seventh Writer という能力は対象が人に限られており、人形になった僕には通用しないらしい。

僕はその主人公を探して小説通りの事を邪魔して小説通りの結末を回避した。

そして次の日に未来君に会った時、彼の様子がおかしかった。

彼はその物語の変えられた部分を忘れていた、原稿も途中から消えており、その物語は未完のまま終わった。

これが僕の出切る事 Un Finish（未完）だった。

その後、かがりさんに協力してもらい（その分面倒事を押し付けられている、主に掃除とか）それからの未来君の物語は一度も完結していない。

そう、今の所は……

|||||

急がないと……………

日向さんが危ない！……！

No s i s t e r No b r o t h e r 6 (後書き)

Seventh Writeの説明についての補足

例えば一月一日に鈴樹君の物語を書きました。

ストーリーが始まり完結するのは十二月二十九日～一月四日の間の言動や思考で、記憶や夢は七日の枠には当てはまらない。

都の場合は人形になったのが五月二日で、つまり二日まで人間だったので五日までの物語となっている。

**N o s i s t e r N o b r o t h e r y (前書き)**

投稿するまでの間が縮まらず申し訳ありません。

7 / 5 とくつつけました。

は作者Tetsuyaの言葉です。

No s i s t e r No b r o t h e r 7

「その名前つてのは、みくだ」

ミク？あの歌うロボットのこと？

「なんだそりゃ、まるで馴染みの無い名前だな  
遥だったらビックリだったのに。」

「そうだな、菜子なら面白かったのに」

ちよ、おま……てめえ！！！！

「相沢さん呼び捨てにするなああああああああ！！！！  
！！！！！！！！」

校門前の時と同様に絶叫している僕だった。

学習能力の乏しい僕である、そして今は場所が悪かった。

ざわざわざわ！？（クラス中が僕を見る音）

はい！教室でした。……………何だよ、章替えしろよ、こんなシーン  
長いこと描写しても面白くないよ？

「はあああ……………さっきも言ったろ、場所を考えろって、何で相沢の  
ことになるとお前はそんなに盲目的なんだよ」

くそつ、焚き付けたのお前だろう！？あとお前は馬鹿なんだから  
盲目的とか言葉使うな！

なんて現実逃避しても現状は全く変わらない。

当たり前だ

「あ、あのう、木場君……………どうして私の名前を大声で叫ぶのかな？」

あらビックリ！相沢さんが僕に話しかけてきました。

普段なら諸手をあげて喜ぶんだけど今はちよつと状況が悪いかなあ。

というかどうしよう！？相沢さん、ガチでひいてるよ！！

「相沢、それはコイツが突発性絶叫候群とつぱつせつぜつめいこうぐんという病気でな、いきなり叫びだすんだよ、残念な事にな」

ちよ、おま、悠我！！どさくさに紛れて何テキストほざいてんだ！！

「そうなんだよ、時も場所もかまわず絶叫し放題なんだ、でも今日は多いほうでいつもは少ないんだよ、それと絶叫する内容についてはあまり意味は無い」

いや、ナニ便乗してんの善之助！？違うからね、僕はそんな怪しい病気じゃ無いから！！クラスの大半が『そうなんだ……………』とか『そういえば今朝も校門で……………』とか納得しちゃってるじゃん！！

「ち、ちが……………ムゲツ！！」

否定しようとして口を開くと善之助にあんパンを突っ込まれた。

いつの間に用意したんだよ……………

「いや、悪かったな相沢、コイツがいきなり絶叫して」

本当のことなのに今の謝罪、何か納得いかねえ！！むぐむぐ！！

「全くだ、ホントに残念な奴で申し訳ない」

悠我！！好き勝手言ってるじゃねえ！！あ、これつぶ餡だ。

「そう？意味は…無いんだね？」

ああ、納得しないで相沢さん……ゴックン。

「あいさ……………」

キーンコーンカーンコーン

始業ベルウウウウウウウウウウウウウウウウ！！！！！！

「ヤベ、もうホームルームだ」

クソオ！！寄ってたかって僕の弁解を邪魔しやがってええええええ！！

！！！！

「おーし出席とんぞー」

やる気の無い先生の言葉を聞き流しつつ二人への仕打ちと相沢さんへの弁解について考え始めた。

~~~~~

「何か言い残す事はあるか？」

ホームルーム終了後、僕は善之助と悠我をトイレに引きずり込んでいた。

理由はもちろんさっきの僕の言い訳を邪魔した事の復讐だ。

ゴスツ！ バコツ！ メキツ！

四秒でボコボコにされました……………
卑怯だよ、二人がかりなんて……………

「何か文句でもあるか？」

ハモって言うなよ……………怖いじゃないか……………

「うう……………どうしてさっき、あんな適当な事言ったのさ？あれじゃあホントに残念な奴じゃないか……………絶対ひかれたよ……………」

満身創痍ながらも何とか言わなきゃいけない事を聞く。

「「どうしてってそっちの方が面白いからに決まってるだろうが」「

一言一句同じタイミングでした……………

オニだ！！！！この二人！！！！！！

「元々善之助が「叫んだお前が悪いだろ」……………」

苦し紛れの言い訳を言いきる前に否定されました。

だがもつともだ！

「ああ、もう相沢さんの顔見れないよ……」

もう僕の学園生活は灰色だよ……この二人の悪魔のせい……

「安心しろ、元々脈無しだったじゃないか」

ブツチイイイイイン

頭の中で種がはじけた。

「言いたい事は、それだけかあああああ……！！！」

ゴスツ！ バコツ！ メキツ！

一発のパンチも当てられずにボッコボコにされました。

二人がかりなんて卑怯だYO！

「何か文句でもあるか？」

だから何でそんなにきれいにハモるんだよ、怖いって。

あと、もう少し手加減してよ、起き上がれないじゃないか……

キーンコーンカーンコーン

「あ、やべー限目って何だっけ？」

「たしか古典だったはず」

「マジかよ、俺あの先生にめえ付けられてるんだよなあ」

「お前に目を付けていない先生なんていねえって」

「それもそうか！」

「「あっはっはっはっは………」」

「僕を置いていくなあああああああ……！！！！！！！！！！」

二人は談笑しながら僕を置いて行きました。

「ああ、これも夢だったらしいのに」

二人の去った後のトイレの片隅で僕は同じ内容の一人言を八回くらい呟いていた。

ちなみに今は、一限目の真っ最中で僕は絶賛サボタージュを決め込んでいた。

今の精神状態で授業を受けれる気がしない、受けれない気がない。

ブ〜 ブ〜

な、なんだ？お尻がブルブルする！？べ、別に二連発で屁なんて

こいてないぞ!!

ゆっくりと震えている場所に手を当ててみると……

「ケータイ?なんで?」

もちろん僕のものではない、こんな物が買えて毎月お金を払う余裕など家には無いのだ。

とりあえず二つ折りのそれを開いてみると、待ち受けがMTHB

(5 参照) だった。

趣味丸出しだな……じゃなくて

Eメールが届いていた。

それを開いて見ると悠我からだった。

『トイレに蹲っている(笑)ヘタレな木場?毛糸君へ、君に朗報だ。安心していい、相沢さんやクラスの皆は何も無かったかのように授業を受けている、授業の最初に欠席無しといっても疑われなかった。それくらいいつも通りだ。』

僕は無言で両手に力を込めた。

ちなみにそのケータイは二万円以上する、決して壊さないように』

……

「ぬわああああああああああああああああああああああああ!!」

!」 突発性絶叫症候群発症中

なんなの?アイツは?どうゆう神経してるんだっての!なんで木

場で疑問符を付けるんだ！あと毛糸は誤字だろ！！そして地味に空気が扱いてんじゃねえ！！！！

ぐぐぐと両手に力を込めるが、ケータイに負荷はかかっていない。一万円というのは僕にとって、とても高額なのだった。

「あいつ等、どこまで人をおちよくつたら気がすむんだ？」

ブ〜 ブ〜

ええい、しつこい！！

再び震えだしたケータイを床に叩きつけようとして腕を振り上げた

『そのケータイは一万円以上する、決して壊さないように』

.....

ピタリと止まりゆっくりと腕を下ろす。

いちまんえんかあ、そりゃ壊せないよ。

思わず涙が零れそうになったけどそれを堪えて再びケータイの画面を見てみるとまたしてもメールだった。しかも登録されてないのか送信者が誰か分からない。

そしてこのケータイは多分善之助の物だろう、彼宛のメールかもしれない。

よし、読もう。

僕は迷わずそのメールを開いた。

『今このメールを開いてるのは木場君ですか？』

ん？なんだこのメール、名指しですか？

『はい、このケータイはぼくのじゃないけど』

ぎこちない操作でその送信者に返信した。
するとまたしばらくしてケータイが震える

『よかった、私、相沢だよ木場君、今授業休んでるけど大丈夫？』

【相沢】何か見覚えのある名前だな……………あいさわ……………A・I・
S A・W A!?

相沢って相沢さん!?あのエンジェルぷりちい相沢さんでござい
ますか???

どういうことだ?これは善之助のケータイ(多分)でそれに僕宛
の相沢さんからのメールがきた……………うん意味が分からない。
なんて考えている間に新しいメールが来る。

『平地君から聞いたの、木場君が病気で落ち込んでるって』

……………怒っているのか感謝したほうがいいのか分からんぜえ。

えっと、相沢さんとメールできるといふ夢のようなシチュエーシ
ョンを用意してくれたのは確実にあの二人だ、僕のスラックスのポ
ケットにケータイが入っていたのがいい証拠だ。

だけど、そこに至るまでの経緯が酷すぎる。

そう酷すぎる、だが……………

ありがとう、二人共……………僕は君たちを忘れない……………

持つべきものは良き親友だ。

『ありがとう、だいじょうぶだよ、しんぱいさせてごめん』

とりあえずそう返信する、一つだけワガママを言えば僕はメールを打つことに慣れていないということだ。

当然だよなケータイ持って無いもん。

あ、返事来た。

『本当に？私でよければ相談にのるよ？』

..... 夏？

何々、なんて書いてあるんだっけ？

『本当に？私でよければ相談にのるよ？』

そ、そうだん？

相談―物事を決めるために他の人の意見を聞いたり、話し合ったりすること。

また、その話し合い。「デートの予定を―する」「新婚旅行先を―する」 一部大辞林からの引用

ありがとう善之助、悠我、僕が死ぬ時、きっとその名を最後に口にするだろう。

『それなら、あいているじかんにお願いします』

お、送っちゃった、どうしよう!?!.....わ、返信きた。

『はい、じゃあ昼休みに校舎裏で』

昼休み 校舎裏 相談 二人きり ×××× 僕にはとても書け

ません)

よし、昼休みまで充電だ。

「はるがきくた　はるが（以下略）」

スキップ気分で僕は歌いながら廊下を歩いた。

その数十秒後、教頭先生に見つかって数十分間、説教を受けた事はまあ当然だった。

その説教されている間、僕は昼休みに相沢さんとキャツキャウフフできると信じて疑わなかった。

これまでのやりとりが全てメールであるという事も忘れて。

N o s i s t e r N o b r o t h e r 7 (後書き)

次回は日向さん視点です。

N o s i s t e r N o b r o t h e r s (前書き)

読みにくい…というか時系列の分かりにくい話ですいません。

「みくー、元気してる?」

あたしはベットに寝転がりながら引越す前の学校の友達と電話していた。

「してるよー」

明日から転校生としてのあたしの学園生活は再スタートする、別に前の学校でトラブルがあった訳ではないけど、子供というものは誰だって親の都合とやらに引張り回されるものだから。

あたしの両親は三年前に一度離婚していて(理由は聞かされていない)、その間あたしは小学校が変わり、仲の良かった友達と離れて、一年と一緒になかった同級生と卒業式をする事になった。

だいたい三年も離婚してたくせにいきなりまた再婚するだなんて勝手すぎる!そのせいでまた両親は同居する事になり、あたしはようやく住み慣れた土地から、全く知らない土地に住むことになった。最初に住んでいた場所、離婚した後の住居、再婚後の家、全てが違っていたから。

「急だよねえ、みくの両親って一度離婚するまで仲良かったの?」

「ぜんっぜん良くなかった。喧嘩ばかりで家事はしないし常に互いの愚痴ばかり言ってる。何で結婚したの?って聞きたいぐらいなのに今では気持ち悪いくらいバカップルなの、全く、どうかしてるわ」

「うわあ、それホント?」

「うん、マジ」

やっぱり持つべきものは本音の話せる友達だ。こうして話してるだけでも寂しくなくなる。

「電話してくれてありがと、また電話してね」

ケータイを枕の横に置いて明日に備えて眠ることにした。

明日はいい日になるようにと祈りながら。

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

『なあ、未来はどこへ行きたい？』

『うっくん、産まれた土地かな？』

『……やっぱり今の場所は辛い？』

『うっくん違っよ、また遊びたいから、小学校でいつも一緒にいた……お姉ちゃんと』

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

夢を見ていた、そんな気がする。目を開けると何故だか涙が零れた、やっぱり寂しいのかな？あだし。

「こんなんじゃ、駄目、かな」

両手で自分の頬を挟むようにバチンと叩く、そして気合を入れる。両親が離婚する前からあたしはこうして自分で自分に活を入れていた。

「よしっ！何でもかかって来い！」

その三十分後、あたしは迷子になった。

〜三十分後〜

「もう、学校なんて見当たらないじゃない！」

自宅を出発して十分間、父親から『五分で着くよ〜』と渡された手書きの地図を見ながら嘆息する。

「何が、五分で着くよ」

周りには中途半端に舗装された道と田畑と山しか見えない、手元

には小学校低学年が書いたような紙切れが一枚あるだけ、別に五分で着くなら、少し歩けば見つかるだろう。と高を括っていたんだけど、学校どころか、家一軒見つからない。って道行く人すらいなし！

「どこなの、ここ」

だんだん不安になってきた、あれ、ここまでどうやって来たんだっけ？

振り返ると目の前と同じような景色だった。当たり前だ。来た道戻った方が良いかな？

五分後

「なんで戻れないの！」

半分パニックを起こしたあたしは一人で叫んでいた。誰もいない事を確認するために。

って来た道に戻っていたハズなのに何故か山の中にいた、ホントになんて？

「朝から騒々しい人ね」

ヤバツ！？聞かれてた？……じゃなくて、やっと人が見つかったあ。

「見慣れない人ね、この山は私有地だから勝手に入られては困ります」

え？そうなの？

「まあでも看板も壊れちゃってるから、別にいいんだけど」

その人はふつと小さく微笑んだ、きれいな人だな、あたしと同じ学校の制服を着てるから歳はそんなに離れていないと思うんだけど、なんていうかすつごく大人びていて年上にしか（こういうと失礼かな）見えない。なんていうか生徒会長でもやってそうな人。

「あ、すいません、あたしここに引越したばかりで迷っちゃて…その、ごめんなさい」

するとその美人さんは穏やかな顔をする。

「だから、別にいいんだって、それより一緒に学校行きましょう。登校途中なんですよ？」

美人さんはあたしの制服を指差しそう言った。

「はい、ありがとうございます、助かりました」

よかったあ優しそうな人で、もしこんな山の中で出会った人が中年男性だったらと思うと寒気がする。

「赤碕静、よろしくね転校生さん」

へ？

一瞬何を言ったのか分からなかったあたしは数秒考えてその人の名前だと分かった。

「はい、西燕さいえん……じゃなかった日向未来です、よろしく願います、赤碕さん」

あたしが名乗ると赤碕さんは少し考えるような仕草をした。そうした仕草もサマになっている。

「日向さんね、どういう漢字を書くの？」

「影日向のひなたに過去未来の未来でみくです」

説明すると何故か笑われた、そんな可笑しな名前なのかな？

「ごめんなさい、クラスにひゅうがみらいっていう日向さんと同じ漢字の男子生徒がいてね、同じクラスになったら可笑しいなと思って」

「う、それはちょっと嫌ですね」

絶対からかわれるネタになるなそれは。

「でも彼、ちょっと変わってるけど面白い人だから」

そう言いながら赤碕さんはニコツと笑った。

その時の赤碕さんが猫をかぶっていたと知るのもうちよい後の

事である。

山を降りてから五分ほどでやっと周りの景色が町っぽくなってきた。

あたしと赤崎さんはこれまでの道中に部活や学年、クラスの雰囲気などの話で盛り上がった。そこで一番驚いた事は、なんと赤崎さんとあたしは同じ学年だという事だった。

絶対上級生だと思ったのに。

「日向は初対面の相手に対して買い被りすぎるんじゃない？」

「そんな事ないですよ」

ファーストコンタクトから五、六分であたしは赤崎さんとケータイの番号とメルアドを交換していた。

どうやらこのままいけば、ここの学校生活も安泰かな。なんて一安心していると

「びええええええええええええん！！」

目の前にないているランドセルを背負った女の子が現れた。田舎町らしく朝なのに人通りがあたし達とその子しかない。だったら仕方ないよね。

「どうしたのかな？お姉さんに話してくれる？」

あたしはその子をみて三秒後には話しかけていた。そんなあたしに赤崎さんは軽くあたしの肩を叩いた。

「日向、遅刻するよ」

……どうやらあたしは赤崎さんに対するイメージを改めなければならぬみたいだ、小学生の子（見た感じ低学年）が泣いているのに「遅刻するから」と見てみぬふりをするなんて……
「赤崎さんは先に行ってください、この子はあたしが面倒見るんで、そう言つと赤崎さんは笑い出した。」

「日向、何言ってるの？貴方はこの町の地理に疎いでしょう？」

それは、もつともだけど、それでも見捨てる気なんて無い、だってあたしにも……助けてくれた人がいるから。

「でも赤崎さん、一人より「三人ね」ふた……え？」

喋ってる途中に言われたのでよく聞き取れなかった。

「都会から来たって言うてるからてつきり現代人ツぽい人かと思っただけど……お人好しなのね、ああ見誤ったな、まさかこんな面倒臭い人だったなんて」

さっきまでとは打って変わって平坦な口調になった赤崎さんが捲くし立てた。あれ、もしかしてこっちが素？

「あの赤崎さん？」

混乱したあたしは意味も無く名前を言う。そんなあたしをキツと睨みつけ

「その子はあたしが面倒見るわ、遅刻になるけど同級生の子が……学校に行こうとして山に入っていくような方向音痴の人が道も分からない土地で小学生を連れまわして、もし危険な目にあわせたり、

怪我でもさせたら夢見が悪いから」

完璧な優等生発言でした。

そしてあたしのプライドはズタズタにされました。

なんだろう？ さっき赤碕さんが遅刻すると言ったのもあたしが相手しても遅刻するだけで解決しないと思っただけの言葉だったのかもしれない。

つまり

「ありがとうございます赤碕さん！」

なんて真面目で頭のいい人なのかな、さっき心の中で少しでも軽蔑して本当にごめんなさい！！

「はいはい、急ぐわよ」

そう言うと赤碕さんは泣き止み、あたし達を不思議そうに見ていた女の子に話しかけた。

その女の子は拙い口調で説明を始めた。

どうやらその子はいつも兄と一緒に集団登校の集合場所まで行っていたらしいけど、今日は兄が風邪で休んでいて一人で集合場所に向かったんだけどいつも兄の後ろを付いて行っただけなので迷ってしまいようやく着いた頃には他の人たちは出発してしまっていた。

一人で学校へ行った事が無いその子は困り果てて泣いていた、という訳だ。

ちなみにこれだけの話を聞きだすのに十分掛かりました。その時の赤碕さんの粘り強さには何か母性を感じました。

そしてその子を小学校まで案内して（赤碕さん、女の子、あたしの順）ようやくあたし達が中学校に到着した頃には……

「ま、遅刻よね」

赤碕さんがうんざりしたように呟く。

えっと、あたしが悪いのかな？でも秀困氣的にそうだから謝っておじつ。

「ごめんなさい、赤碕さん」

「別にいいけど、ほら職員室に案内するから」

赤碕静、あたしが最初に会った同級生はどこまでも優しい人でした。

No s i s t e r N o b r o t h e r s (後書き)

次は景人サイドになります。

都だけ話が進みすぎてしまってバランスが悪くなってしまいました。
ごめんなさい。

N o s i s t e r N o b r o t h e r s (前書き)

今回はかなり短くなってしまいました。

「けーいとー、ケータイ返せー」

一限目の終了チャイムで僕は教頭先生の説教から開放されて、ようやく教室に戻ってきた時の第一声が、善之助のそんな言葉だった。

「ああ、ありがとな善之助、お蔭で…僕は…僕はああ…ムグツ！」
喋っている途中で口の中にあんパンを突っ込まれた。本日二度目だ。

「ふぁんでふいふいありくふいひひふぁうふつふおふふおは（何でいきなり口にパン突っ込むのさ）？」

「何言ってるか分からんけど、今の流れから次に突発性絶叫症候群がくると思ったから」

叫ばないよ、とは今まさに叫ぼうとしていたので断言できない僕だった。むぐむぐ…あ、これはこし餡だ。

ゴックン

「お前はエスパーか」

僕の行動を察知し、すぐさまあんパンを用意する親友にちょっとした恐怖を感じる。

「アホ、お前が分かりやすいだけだったの」

「まあ、不本意だけど僕が分かりやすいという事はおいといてだ、何でそんなにあんパンを持つてるの？」

「それは…いや言わないで置こう」

何でだよ？と聞こうとして止めた。確かにどうでもいいことだ。

「そうかい、じゃケータイ返すよ、ありがとうな、お蔭様で僕にも…何してるの？」

善之助はケータイを受け取るとすぐに何やら操作を始めた。

「お前…やられたな…」

かと思えば何故か凄く哀れむような目で僕を見た。

「やられた？何それどういう意味さ？」

ば登録されているはずもねえ、元々俺のケータイをお前のスラックスに入れたのも悠我が面白くなるからって言うから、そしたらこんな笑えない冗談を用意してたなんて……………」

「ゆ、許せねえ……………」

よりによって相沢さんだと名乗るなんて……………これは冗談にしては性質が悪い、いや、悪意しか感じない！！

「そうだな、これはちとやり過ぎだな、メルアドだってN a k o . M i k u . M e m o r y @……………ってテキストだし」

ふん、十分に楽しんだか？悠我、だけどこれまでだ……………今から服をひん剥いて廊下に晒してやる……………」

「木場君！戻ってきたんだ、良かった。でも昼休みにはちゃんと来てね、待ってるから！！」

……………さあ今から……………あれ？

「なあ善之助、今の相沢さんだよな？」

隣に立っている汗をダラダラと流す友人に聞く。

「さあ、幻覚幻聴じゃないか？」

確信犯か！

「そうか、見間違い、聞き間違いかあ……………って納得すると思う？僕にはたった今、さっきのメールのやりとりが無かったら有り得ない事を言われたんだけど？」

汗を流し続ける善之助はこちらを見ようとしない。

「これはさっきのメールが成守馬士では無かったという事じゃないかな？」

N o s i s t e r N o b r o t h e r 9 (後書き)

未来君の書いた物語もとうとうクライマックスに近づいてきました。
次回は日向さんサイドです。

No s i s t e r N o b r o t h e r 1 0 (前書き)

クライマックスに近づいてきたのにストーリーの進み具合が亀のごとく遅いです。ですが兎にはならないように更新していきます。

No sister No brother 10

市立^{くるが}練賀中学校

それがあたしの転校してきた学校の名前だった。練賀っていうのはこの町の名前。

新校舎と旧校舎（木造）と体育館にプールのある中々大きな（想像していたより）学校だった。

「え？佐倉先生いないんですか？」

今は職員室で赤碕さんが入り口付近のデスクに座っていた先生に事情を説明していた。そこで判明した事は、あたしと赤碕さんは同じクラスであるということと担任の先生がもうクラスに向かっているということだった。

「やった、赤碕さんと同じクラスだ！」

「そうねークラスメイトが増えたーやったーわーい」

物凄く不服そうな赤碕さんだった。理由は、なんだろう？

元々クラスが一学年二クラスなので確率的には二分の一だったんだけどね。

「あ、でもそのクラスには日向^{ひゅうがみらい}未来^{みらい}って男子生徒がいるんですよ？どんな人だろう？」

「いつも原稿と睨めっこしてるただの根暗よ」

なんかさつきと言ってること違う………そしてすごくテンション低い、出会ったばかりが嘘のようだ。

「ほらここよ」

辿り着いた教室の前で赤碕さんが立ち止まる、そして中からタイミングよく

「なんだ、女の子か…」

……どうやらあたしはとある男子生徒からは歓迎されていないみたいだった。

女というだけで……

「変態の言う事は気にしないで」

赤碕さん……やっぱり優しい……

「お、来たみたいだな、よし入れ」

ドアの向こうから成人男性の声がした、きっと担任の先生だろう。赤碕さんはドアを開けて中に入る。続いてあたしも。

「ん？何で赤碕までいるんだ？」

教室に入ると約三十人が一斉にあたし……じゃなくて赤碕さんを見た。

「登校してくる途中で迷子になってるコイツの面倒みながら来たんです」

と言いながらあたしを指差した。

ううごめんなさいい 方向音痴で……

すると担任の先生（凄くマッチョだ、体育教師かな？）は不思議そうな顔をした。

「時間になっても来ないから何の演出かと思っていたんだが……迷子だったのか」

ええええええええええええええええええええええええええええええ

演出？どういふ発想なの？それってよくあることかな？

「「「まあそう思うよねえ」「」」

クラスのほぼ全員が首を縦に振りました。どうやら常識のようです。

ですが一人何か言いたそうな生徒がいました。きっと彼はあたしの仲間です。

「はい、これが家の敷地内に居たので仕方なく案内してきました」
これは赤碕さんの弁、ホントにスミマセン。

「ごめんなさい、赤碕さん」

あたしさつきから赤碕さんに頭下げっぱなしだな、クラスの人たちからはどう思われているんだろう？

ん、あれ？赤碕さんと先生が何やら口論を始めました、あたしの紹介は？

「あの、自己紹介……してもいいですか？」

おずおずと聞くと先生が今まさに気付いたようにあたしを見た。

「ああ、スマン、とりあえず赤碕は席に座れ、改めて今日から二―Bに転校した日向未来さんだ」

ようやく自己紹介が出来る、思えばここまで長い道のりだった……山行ったり、小学校行ったり……。

感慨深い気持ちを振り払いあたしは教壇の上に立つ。

「親の事情でこちらに引越してきた日向未来です、よろしく」

そう言った途端にクラスがざわついた。理由は恐らくこのクラスに”彼”がいるからだろう。

「いやあ先生もビックリだ、まさか日向ひゅうがと同じ漢字の名前の奴がこのクラスになるなんて」

何か白々しいな、面白がって同じクラスにしたんじゃないかな？
そしてクラスの注目の的になっている彼、日向未来君ひゅうがみらいがニヒルに笑い、口を開いた。

「ネタだな、三流の、俺だったらもつと面白く出来る」

言ってることの意味が分かりませんでした。どうやら赤碕さんの言っていた『変わっている』は合っているようです。

「席はそうだな、楠木から一つずつ後ろに下がれ」

先生に指名された生徒は先ほど何か言いたげな顔をしていた男子でした。そしてその隣の席は……

「で日向ひなたは空いた席に座れ」

日向君の隣でした。

「ふう、四流のネタだな」

やはり、言ってる意味が分かりませんがこれからこの学校

で長く接する事があるだろう彼とは良い関係を築いておくべきだろう。

「よろしくね、日向君」

「よろしく」

これがあたしと日向君とのファーストコンタクトでした。

そして初授業は数学です。

もうドキドキですよ、なんたってこれから会う先生は誰も知らないのです。

数学の先生どんな人だろう？男性かな女性かな？

わくわく

がらがら

来た！！ええと体格は大きめで男性で……って

「佐倉……先生？」

あれ？佐倉先生って体育の先生じゃないの？ジャージ着てるし、ムキムキだし。

「どうした、ひなた、先生がどうかしたか？」

あたしが戸惑っていると後ろからノートの切れ端が見えた。

『佐倉先生は見た目体育教師だけどれっきとした数学教師なんだ』

えええ、そうなの？後ろを向くとあの何か言いたげにしていた彼だった。

仲間の彼が言う事ならきつとそうなのだろう。

「いえ、髪型が素敵だな……. と思って」

とりあえず適当に答えた。ちなみに先生は角刈りで髪をいじるよ
うな余裕は無い。

「そうか？いやあ都会から来たひなたに言われると照れるな」

どうやら満更でもないようでした。クラスの皆は忍び笑いをしています。ごめんなさい先生。

そして新しいルーズリーフを一枚取り出して『教えてくれてありがとう』と書き、手紙折りにして後ろにまわした。

その後、幸いにも教科書が余ってたらしく、あたしはすぐにその教科書を受け取り、特に授業内容にも取り残される事も無く、順調に一限目が終わりました。

そして休み時間にはお約束の…….

「ひなたさんって前はどこに住んでいたの？」

「趣味と特技は？」

「好きなアーティストは？最近流行のK-POP？」

「みくって呼んでいい？」

「今週の土曜はヒマ？一緒に遊ばない？」

「彼氏とかいたりする？遠距離恋愛とか？」

「このクラスってどんな感じに見える？」

「どこの部活に入るの？よかったら陸上部に来ない？」

「こら、今は質問タイムでしょ、勧誘しないの」

「もう……委員長のケチ」

「ねえ、さっきの佐倉先生に言ったことって何？超面白かったんだけど？」

「赤碕と今朝なにか話したの？」

「ねえ君、実は男の娘だったりする？」

「問おう、貴女が私の 自主規制」

質問攻めが待っていました。

ホントに皆同時に言ってくるから返す間が無い、なのに次々と質問されるから最初何を聞かれたか忘れてしまう。そして最後の二人は何なのかな？意味が分かんないよ。

「えっと前に住んでいたのは………」

こうして半分も答えられないうちに休み時間は終わってしまいました。

~~~~~

「あたしはつぶ餡派かな」

あれから休み時間のたびに質問攻めされ、四限目の終わった後にやっと全部の質問に答えきった。

つ、疲れた〜



今は昼食の時間で皆ご飯を食べてる。この学校には購買があるらしいけど、あたしはお弁当なので利用する事は無いだろう。

そして机にお弁当を広げていると、視界の端に原稿用紙が見えてさらに、見覚えのある単語を見つけた。

そういえば隣の席の日向君と後ろの席のええと……楠木君（だっけ？）がずっと自作の小説について話し合っていた。

「ねえひゅうが君、その原稿用紙って何が書いてあるの？」

あたしが思い切って話しかけると日向君はこちらを見もせずと言った。

「これは俺の夢だ」

なんでしよう、この訳の分からない返事は

「夢って……どうゆう事？」

「俺は、文士になるんだ」

ブンシ？聞き慣れない言葉ですね、作家のことかな？

「えっと、じゃあこれは小説なのかな？」

原稿用紙にはチラッと見た限り焦っている男子高校生が何か言い訳している所みたいだ。

「ああ、そうだけど」

やっぱりか、だったら

「読ませてくれない？」

あの人の名前があるんだもん、内容が気になって仕方ない。

「どうぞ、まだ駄文だが読者が多いに越した事はない、まだ未完だけどな」

そう言つと日向君はクリアファイルから原稿用紙を取り出してあたしに渡してくれた。

「ありがとう」

さあとりあえず目の前のお弁当から片付けなきゃ！

**N o s i s t e r N o b r o t h e r 1 0 ( 後 書 き )**

次からはとうとう未来君の物語も山を迎えます。

ちなみに未来君の書く物語は悲劇です。

生易しいハッピーエンドなどは期待しないでください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8763z/>

---

クレイジードール

2012年1月14日10時46分発行